

# スロベニアの日本語教育

重盛千香子（リュブリャーナ大学）

chikako.bucar@guest.arnes.si

## 【要約】

本稿では、まず 1980 年代から現在までのスロベニア共和国における日本語教育史を概観する。そして、当地の日本語教育の現状と、スロベニアの教育制度における日本語教育の役割を考える。また、日本及び日本語に関連してスロベニアの社会でどのような機関がどのような活動を展開しているかを見る。言語の学習自体を見ると、他のヨーロッパ言語の学習に比べて、スロベニア人の日本語学習者が特に注意を払うべき部分は、日本語の正書法、コミュニケーションにおける敬意表現を含めた文体の選択、そして、時事問題や歴史・文化背景への関心だと考える。終わりに、今後の課題として、グローバル化が進む中での各専門領域の学際化がさらに進み、若い世代に専門家が育ちやすくなる環境を望む。

## 1、スロベニアにおける日本語講座の始まり

### 1. 1 スロベニア東方学会

体系的な日本語教育は 1982 年、当時はまだユーゴスラヴィア社会主義連邦共和国の一部であったスロベニア共和国のリュブリャーナ市にあるスロベニア東方学会（SOD = Slovensko orientalistično društvo）の活動の一つとして始まった。この会の極東部門（Sekcija za Daljni vzhod）ではすでに 1987 年から中国語講座が行われており（Predin 2005: 33）、日本語の学習は、東アジア諸言語のうちの二つ目の言語として提供されることになった。夕方、週に 3 回、2 時限ずつの時間割で、リュブリャーナ大学文学部の教室を借りて行われた。クラスの人数は初めの数年間、平均 25～30 人ぐらいで、学年末（6 月）にはその半数ぐらいの学習者が残るのが普通であった。学習者のモチベーションは高く、開講の翌年の 1983 年にはすぐに 2 年目のクラス（週に 4 時限）も組まれた。1990 年からは、夏期短期コースも導入され、日本から夏休みを利用して訪れる日本語教師によるボランティア授業なども行われるようになった。これは、スロベニアで日本語教育を始めた教師たちの知人・友人の中で、中欧やバルカン諸国の日本語教育の発展に興味を持つ方々が現地を訪れ、実際に現地の日本語教育に触れてもらうことから始まった。すでに 1988 年から毎年、8 月または 9 月に二日間、日本語教育連絡会議が行われており、その際にヨーロッパのどこかで集まる教師などが、リュブリャーナにも立ち寄ってくれることで夏期コースも活気を帯びたことになる。1991 年の夏、ユーゴスラヴィアで内戦が発生した時を除いて、これら通年と夏期の日本語コースは、リュブリャーナ大学に新しい学科が設立されるまで途切れることなく続けられた。

### 1. 2 リュブリャーナ大学文学部に新学科設立

1995 年の秋、それまでスロベニア出身で各国へ留学していた個々人や各方面の機関の支援を得て、リュブリャーナ大学文学部に新しくアジア研究学科（Oddelek za azijske študije）が設置された。設立時には、中国研究と日本研究の 2 講座が設置され、日本研究の場合、それまでの SOD の枠における語学学習の内容をベースに、より集中的、専門的な日本語教育が行われるようになった。学科の設立から今までの四半世紀の間に、日本語教育においても様々な発展や変化があった。初めの 13 年間は旧高等教育制度、つまり、二重専攻（ダブルメジャー）の 4 年間の学部課程として教育が行われ、4 年間の授業ののち、論文執筆期間を経て卒業する制度で、実質的には 7 年から 8 年目に卒業するというのが平均的であった。この学部課程の授業のうち、語学関係の科目は現代日本語 1、2、3、表記法、これら基本科目に加えて、日本言語学、翻訳技術 1、2、古文入門などの科目があった。学生数は、例えば 2004/05 年度の場合、計 195 名（1 年次 75 名、2 年次 21 名、3 年次 28 名、4 年次 17 名、論文執筆中 54 名）であった。

ボローニャ改革後は学部課程が 3 年間に短縮されたため、いくつかの語学科目（翻訳、古文など）は、学部レベルではなく、修士レベルで開講することになった。ボローニャ制度になって新しく導入されたのはシングルメジャーである。2009/10 年度にはダブルメジャーに並べてシングルメジャーの学生も募集することになり、したがって 2010/11 年度からは修士課程にもシングルメジャーを受け入れることになった。

リュブリャーナ大学文学部の日本研究における日本語教育の主な特徴を挙げると次のようになる。

- スロベニアでは、大学 1 年入学時に学生全員が初心者として日本語の学習を始める。現在に至り、日本語はスロベニア共和国の初等・中等教育で外国語選択科目としては教えられていない。(Straus 2018)
- チームティーチング  
1 年次から 3 年次にわたって、現代日本語の授業は 2～3 人の教師のチームによる演習が行われている。学生は皆、3 年間、複数の教師の指導に接して語学を習得していく。
- 毎週の小テスト  
1、2 年次の学生は毎週、月曜日に前の週に学習した項目を問う小テストを受ける。これによって、教師とともに学習の成果・復習の必要性を確認する。(3 年次にはこの小テストを隔週、または 3 週間に一回ぐらいの頻度で行う。)
- 日本国内の大学との連絡が緊密であり、それが語学教育の質の高さにも貢献している。日本から日本語教育を目指す若い実習生・留学生などを受け入れたり、双方向の教師・学生交換などを行なっている。(交流歴の長い大学は筑波大学、群馬大学、東北福祉大学など。詳しくは Bekeš 2005: 10-11)

### 1. 3 スロベニアにおける日本語コース

リュブリャーナ大学文学部では、夕方の時間帯に学外からの学習希望者向けの日本語コースも提供している。文学部以外の諸学部の学生、高校生、一般社会人が午後 6 時以降のクラスに集まる。アジア研究学科に登録している通常の学生向けの授業に比較すると進度はゆっくりで、話し言葉や初級レベルの会話に重点が置かれ、ビジネスや観光で日本訪問を控えている学習者、電子メディアで日本の友人と通信したり会話したりしたい学習者などが集まっている。

また、リュブリャーナ市にある青少年文化センター (Pionirski dom) でも、長年、小中学生のための日本語コースが続いており、スロベニア国内各地のいくつかの小・中学校や高校でも日本語や日本文化を学ぶサークルが存在する。また、民間の語学学校でも個人教授や少人数のグループで日本語教育が行われているところもあり、これらのサークルや語学学校では、リュブリャーナ大学文学部で日本研究を専攻した卒業生が活躍している。

### 1. 4 教材

リュブリャーナ大学文学部アジア研究学科の設立以来、スロベニア人学習者を対象とした教材も作成されて来た。外国人学習者用日本語教材は日本国内・国外にも多数存在するが、スロベニア語を母語とする学習者に焦点を当てた教材の開発も必要である。まず、日本語の基礎文法の説明書が二冊 (Bekeš 2000、Bekeš 2003)、そして日本語表記を説明する教科書 (Hmeljak Sangawa 他 2003、第 2 刷 2007) が出版された。また、しばらくして日本語初級の教科書が二巻本として (Hmeljak Sangawa 他 2012、第 2 刷 2014) 出版された。この初級教科書は、学習者である学生がすぐに自分の生活に結びつけて初級の語彙や文型を使うことができるようにするために、構成を考える上で、表現や会話がなるべくスロベニア社会での実生活に役立ちそうな場面を優先した。大学一年生の前期 (はじめの半年間) で学習する文法事項、文型、役立ちそうな語句やその使い方のヒント、基礎語彙などが、練習問題やスロベニア語の説明とともにまとめられている。

学科の日本研究講座では現在、日本語表記に関する参考書や、中級学習者向けの日本語文法に関する教科書なども、スロベニア語の説明つきで作成中である。

## 2. 日本の知名度、日本関係の行事、諸機関の協力関係

日本語はスロベニア共和国ではいまだにエキゾチックな言語だと言える。スロベニア人だけではなく、ヨーロッパ言語を母語とする人々にとって、やはり日本語は学習を始める動機が低い言語だろう。スロベニアの若者の多くは、まず漫画、アニメなどの大衆文化の文脈で日本語に関心を持つようになる。2006 年にはリュブリャーナ市に日本大使館ができ、それ以降、例えば毎年 7 月に行われる「日本の日 (Dan Japonske)」という催しなどでスロベニア社会にも徐々に日本文化の多様性や現在の日本という国の姿が知られるようになってきた。スロベニアでは他にも、ジャポニズムのルネサンスと言えるような、日本の伝統文化の再発見のような動向が見受けられる。例えば 2017 年にはスロベニアの複数の学術教育機関と大使館との協力で、3 月から 11 月にかけて、JAPOM (Japonska med nami, Japan in Our Midst) と銘打って複数の展示、講演会、演劇などの催しが続いた。これは、日本文化の多

岐にわたる分野の紹介とそれを一般のスロベニア人にわかりやすい形で知ってもらうことを目的とした。(プロジェクト JAPOM については、Hrvatín 2017 に詳しい。)

ビジネスの分野でも、日本との交流が増えている。2019年3月にはその前年から続いて2回目のリュブリャーナ大学の学生のための「日本の経済と企業、日本とのビジネスに関するレクチャーリレー」が行われ、スロベニアに存在感を増す日本やスロベニアの企業その他の機関から講演者を招き、在学生・卒業生を交えて話し合いが行われた。<sup>1</sup>

リュブリャーナ大学の公式ウェブサイトには、現在、大学間国際交流協定のリストに9つの日本の大学の名が上がっている<sup>2</sup>。また、文学部との国際協定を結んでいる日本の大学は10大学となっている<sup>3</sup>。リュブリャーナ大学文学部に入学して日本研究を専攻したいという新入生は多数に上り、毎年10月の新学年から半年以上前の1月～2月に発表される入学希望者数(高校卒業見込みの者)は募集枠に対して平均150%程度である。希望する専攻課程への入学は高校卒業試験の成績の順で決まる。

日本語教育と関連してさらに付け加えたいのは、2017年に発足したスロベニア日本語教育協会(Društvo za didaktiko japonščine v Sloveniji、<https://ddjas.si/> 2019年7月8日アクセス)である。語学教育の分野でスロベニアと日本の関係を強化する目的で創設され、その活動の主なものに首都リュブリャーナ市における JLPT(日本語能力試験)の実施がある。

以上述べたような諸機関、諸活動からも、スロベニアにおける日本語はエキゾチックであるとはいえ、教えたり学んだりするための基盤は十分に固められていると言える。1980年代に初めて体系的に日本語が教えられた頃に比べると格段の差があると言わなければならない。

### 3. 日本語の特徴

スロベニア共和国における四半世紀にわたる日本語教育、主にリュブリャーナ大学文学部での長年にわたる体系的な語学教育の中で、スロベニア語を母語とする学習者に対する日本語教育の中で頻繁に遭遇する問題点が浮き彫りにされるようになった。

これについては、2014年に文学部の学術雑誌 *Linguistica* に採用された論文(Shigemori Bučar 他 2014)に詳しく述べた。この雑誌の2014年54号は、CEFR(外国語の学習・教授・評価のためのヨーロッパ言語共通参照枠)との関連で様々な言語の教育やその学習者などについての投稿を呼びかけたものである。日本語に関しては、まず CEFR の導入による日本語教育や日本語能力試験への影響などを紹介し、後半では、リュブリャーナ大学文学部が提供する各レベルの日本語教育を CEFR の枠に照らし合わせて内部評価した結果を報告した。

文学部で日本語教育に携わってきた複数の教師の考えを総合すると、学生は現在のボローニャ制度の3年間の学部課程の終わりには平均して B1～B2 のレベルに、さらに2年間の修士課程の終わりには C1 程度のレベルに到達する。しかし、CEFR の参照枠に照らし合わせての語学能力レベルの判定は容易ではない。ヨーロッパ言語を母語とする学習者が日本語を学習する上での問題点は、同時に、日本語の特徴を物語るものだと言える。それらは主に、日本語の表記、敬語、語用論的ストラテジー、学習者の日本社会や時事に関する知識と関係した問題点である。(Shigemori Bučar 他 2014: 463～465)

日本語は、ひらがな、カタカナ、漢字の学習に多くの時間と集中力を要求する。語彙の積み上げの過程では中国語の知識が役立つが、スロベニアの学習者の場合、中国語の予備知識がある者はほとんどいない。

敬語や敬意表現に関しては、初級段階から会話などの場面設定に応じて少しずつ導入し、書き言葉におけるの文体も、初・中級の授業で教えているが、コミュニケーションの相手に応じての語彙や文体の選択は、ヨーロッパ言語とは違った難しさを抱えている。

また、スロベニアの大学生は日本社会や文化背景についての一般知識に乏しく、日本や東アジアの時事にはさらに疎い。情報が溢れている現代では、個々人の興味に応じての情報収集がしやすくなっ

<sup>1</sup> この催しはリュブリャーナ大学社会学部の東アジア資料センター(EARL=East Asia Resource Library)で行われ、2018年にはトヨタ・アドリア、三井物産ヨーロッパ、在スロベニア日本大使館、センスム(Sensum、スロベニア企業)、旅行業、翻訳・通訳業に携わる卒業生が、2019年にはELES(スロベニア国営送電事業)、ゲンキ・センター(スロベニアの言語文化教育センター)、個人の翻訳・通訳者などが講演者として参加した。

<sup>2</sup> 神戸大学、上智大学東北福祉大学、東北大学、宮崎大学、山梨大学、早稲田大学、横浜国立大学。

<https://www.uni-lj.si/studij/partnerji/centralni/> (2019年7月8日アクセス)

<sup>3</sup> 青山学院大学、福島大学、群馬大学、日本女子大学、西九州大学、御茶の水女子大学、立教大学、東京工業大学、東京外国語大学、東洋大学。<https://www.uni-lj.si/studij/partnerji/clanice/> (2019年7月8日アクセス)

てはいるが、学生及び学習者に対して日本語やその背景にある社会・文化の特徴への注意を促し、的確な情報ルートを随時紹介していくことも、教師の役割であると考えなければならない。

#### 4. 今後の課題

小さいヨーロッパの中の小さな国、スロベニアでは、今も、これからも、大勢の人が日本語を操る必要はないであろう。経済や学術の分野での諸活動を見てみると、少数ではあっても常時、日本語とその背景に精通し、さらにそれぞれの分野における知識を持って正しい情報の伝達ができる専門家が必要だと思われる。

スロベニアの初等・中等教育における日本語の地位が変わるのであれば、それに合わせて日本語の教育学（教職）も発展させなければならない。日本語が外国語の一つとして採用されれば、それに応じてスロベニア社会における日本や日本語についての知識のレベルも変わっていくであろう。中国語を外国語教育の中に取り入れて実験を行った専門家によれば、小学校の選択科目としての日本語の導入は政治家や経済分野の専門家からの協力が必須であり、長期にわたる難しい経緯を辿らなければならないという。（Straus 2018: 23）

今のところ、スロベニア共和国の法務省認定日本語法廷通訳者は2名である。日本文学に関しては大学の日本研究を卒業した者が数人、現代文学の翻訳に計画的に携わっている。今後、若くて意欲的な学習者の中から、高度の日本語を身につけ、さらに得意な分野を合わせ持つ専門家が育つことになれば素晴らしい。日本語や日本研究と、一方では経済、法律、医学、化学、生物学などを専門とするようなダブルメジャーの学生は育っていないが、それはスロベニアの教育制度の限界によるところもありそうだ。

本稿は、リュブリャナ大学文学部で2019年12月に刊行された以下の出版物に発表した内容を日本語にしたものである。

Tatjana Balažič Bulc, Jana Kenda, Meta Lah, Vesna Požgaj Hadži 編、Poti in stranpoti poučevanja tujih jezikov v Sloveniji（＝スロベニアにおける外国語教育の軌跡）、Znanstvena založba Filozofske fakultete Univerze v Ljubljani（リュブリャナ大学文学部出版）[Japonščina v Sloveniji, 110-117]

#### 参考文献

- Bekeš, Andrej (2005). Glavne poteze študija japonologije na Oddelku AAŠ in zgodovinske kontingence. *Azijske in afriške študije* 9 (1). 4–13.
- Hrvatini, Klara (ur.) (2017). *Japonska med nami: programska knjižica*. Ljubljana: Znanstvena založba Filozofske fakultete. <https://issuu.com/znanstvenazalozbaff/docs/japom> (2020年1月3日アクセス)
- Moritoki, Nagisa (2005). 10 let japonskih študij v Sloveniji. *Azijske in afriške študije* 9 (1). Ljubljana: Filozofska fakulteta. 56–69.
- Predin, Andrej (2005). Pionirsko delo na področju sinoloških študij – intervju z izr. prof. dr. Mitjem Sajetom. *Azijske in afriške študije* 9 (1). 25–41.
- Shigemori Bučar, Chikako; Bekeš, Andrej (2005). Tečaj japonskega jezika pri Slovenskem orientalističnem društvu: pouk japonskega jezika v Ljubljani do ustanovitve Oddelka na FF. *Azijske in afriške študije* 9 (1). 50–55.
- Shigemori Bučar, Chikako (2005). Japanese Studies at the University of Ljubljana. *Acta Orientalia Vilnensia* 6 (1). 50–58.
- Shigemori Bučar, Chikako; Ryu, Hyeonsook; Moritoki Škof, Nagisa; Hmeljak Sangawa, Kristina (2014). The CEFR and teaching Japanese as a foreign language. *Linguistica* 54. 455–469. <https://revije.ff.uni-lj.si/linguistica/article/view/2619> (2020年1月3日アクセス)
- Shigemori Bučar, Chikako (2019). Image of Japan among Slovenes: Borrowed Words of Japanese Origin in Slovene. *Acta Linguistica Asiatica* 9 (1). 75–88.
- Straus, Bronka (2018). Poučevanje tujih jezikov v slovenskem šolskem sistemu: prostor tudi za japonščino? *Acta Linguistica Asiatica* 8 (1). 9–25.

#### 教科書

- Bekeš, Andrej (2000). *Sodobna japonska slovnica za začetno stopnjo, Prvi koraki*. Ljubljana: Filozofska fakulteta, Oddelek za azijske in afriške študije.
- Bekeš, Andrej (2003). *Sodobna japonska slovnica za začetno stopnjo. Del 2, Osnove*. Ljubljana: Filozofska fakulteta, Oddelek za azijske in afriške študije.

- Hmeljak Sangawa, Kristina; Kobayashi, Reiko; Kumagai, Yoko; Shigemori Bučar, Chikako; Maeno, Yoshiaki; Shukuri, Yukiko (2003, 2007): *Uvod v japonsko pisavo: hiragana, katakana in prvih 854 pismenk*. Ljubljana: Filozofska fakulteta, Oddelek za azijske in afriške študije.
- Hmeljak Sangawa, Kristina; Ichimiya, Yufuko; Ida, Naomi; Koga, Michiru; Moritoki Škof, Nagisa; Ryu, Hyeonsook (2012, 2014): *Japonščina za začetnike 1*. Ljubljana: Filozofska fakulteta, Oddelek za azijske in afriške študije.
- Hmeljak Sangawa, Kristina; Ichimiya, Yufuko; Ida, Naomi; Koga, Michiru; Moritoki Škof, Nagisa; Ryu, Hyeonsook (2012, 2014): *Japonščina za začetnike 2*. Ljubljana: Filozofska fakulteta, Oddelek za azijske in afriške študije.